

総合研究大学院大学
文化科学研究科「スチューデント・イニシアティブ事業」
平成 21 年度教員学生連携研究事業 成果報告書

ドイツ・ポーランドの
博物館研究プロジェクト
— 一次世代に受け継ぐ歴史展示とは何か？ —

目次

1. 事業の概要

2. 博物館研究報告

- 2.1. ドイツ歴史博物館（ベルリン、ドイツ）
- 2.2. ユダヤ博物館（ベルリン、ドイツ）
- 2.3. ベルリン概括（ベルリン、ドイツ）
- 2.4. ツェツィーリエンホーフ宮殿（ポツダム、ドイツ）
- 2.5. アウシュヴィッツ博物館（オシフィエンチム、ポーランド）
- 2.6. クラクフ概括（クラクフ、ポーランド）

3. 個人報告

- 3.1. 石田七奈子
- 3.2. 荻野夏木
- 3.3. 工藤紗貴子
- 3.4. 伊達元成
- 3.5. 根津朝彦

1. 事業の概要

本プロジェクトは第二次世界大戦の当事者が亡くなっていく中、次世代に受け継ぐ歴史展示をいかに構築すべきか、この問題意識のもとにヨーロッパが経験した戦争とホロコーストに対して「過去の克服」と記憶の継承を試みるドイツとポーランドの博物館について調査を行い、これまで訪問した日本の戦争展示の博物館や、地域資料館と比較しながら非当事者世代が歴史を認識する場所として博物館をどのように活用・享受できるかを研究することを目的としたものである。

これまで我々は、博物館の比較見学プロジェクトとして3つのプロジェクトを行ってきた。本プロジェクトは、その集大成の研究に位置づけられる。2006年8月にはしょうけい館、昭和館、靖国神社の遊就館、国立歴史民俗博物館の初の戦争企画展示「佐倉連隊にみる戦争の時代」を対象に「博物館と戦争展示の比較見学プロジェクト」を行った（第1回）。次に2007年2月には「戦争資料館と戦跡・基地の比較見学プロジェクト—沖縄から戦争展示を考える」を行い（第2回）、2008年2月には「地域を伝えること「移住者の町」北海道伊達市—生活者にとって必要な資料館とは何か？」を実施した（第3回）。

しかし国内の博物館で得る知見だけでは限界があり、こうした戦争展示とアイヌを代表とする民族の歴史継承の「戦争と民族」展示を国際的に考察する最終章の見学プロジェクトとして焦点を結ぶものである。

非常にタイトなスケジュールの中行われた本プロジェクトは、海外の博物館の最先端に触れることができたこと、メンバーそれぞれが自分の研究と社会との繋がりを海外で発見する新鮮な視点をもって終えることができた。ここで得られた成果は、即効性を持って歴史研究や博物館研究に発揮したいと考えている。

本報告書は、本プロジェクトの成果をまとめたものである。

日程

- 2月13日 移動日：基盤機関—成田空港—フランクフルト空港—テゲル空港（ベルリン、ドイツ）—宿泊地
- 2月14日 虐殺されたヨーロッパ・ユダヤ人のための記念碑および情報センター（ベルリン）見学
15、16日の調査に関する打ち合わせ
ツェツィーリエンホーフ宮殿（ポツダム会議開催地）見学（ポツダム）
- 2月15日 ノイエ・ヴァッヘ（Neue Wache、「戦争と暴力支配の犠牲者のための国立中央追悼施設」
（Neue Wache als zentrale Gedenkstätte der Bundesrepublik Deutschland für die Opferdes Krieges und der Gewaltherrschaft）および
ドイツ歴史博物館（Deutsches Historisches Museum Berlin）見学
ドイツ歴史博物館副館長、ハンス—マーティン・ヒンツ氏（Dr. Hans-Martin Hinz）と面会、
聞き取り調査
- 2月16日 ベルリン市内の旧東ドイツ地域巡検およびユダヤ博物館（Jewish Museum Berlin）見学
ユダヤ博物館、常設展示責任者クリューガー氏および来館者調査責任者ビルケルト氏と
面会、聞き取り調査
- 2月17日 移動日：ベルリン—クラクフ（ポーランド）
- 2月18日 オシフィエンチム（ドイツ語名アウシュヴィッツ）へ移動
アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所（Das Konzentrationslager Auschwitz-
Birkenau）およびポーランド国立オシフィエンチム博物館見学
同博物館日本人ガイド、中谷剛氏と面会、案内を受けたのち聞き取り調査
- 2月19日 クラクフ旧市街、カジミエーシュ地区（ユダヤ人居住区）およびシナゴーク等の巡見
- 2月20日 移動日：クラクフ空港—フランクフルト空港（ドイツ）—成田空港
- 2月21日 成田空港到着

申請者

- 安田常雄（日本歴史研究専攻・教授）
久留島 浩（日本歴史研究専攻・教授）
石田七奈子*（日本歴史研究専攻・歴史）
荻野夏木*（日本歴史研究専攻・民俗）
工藤紗貴子*（日本歴史研究専攻・民俗）
新免歳靖（日本歴史研究専攻・考古）
伊達元成*（日本歴史研究専攻・考古）
根津朝彦*（日本歴史研究専攻・歴史）

*は旅行者

2. 博物館研究報告

2.1. ドイツ歴史博物館 (Deutsches Historisches Museum Berlin)

2010年2月15日 副館長ハンス・マーティン・ヒンツ氏 (Dr. Hans-Martin Hinz)

ドイツ歴史博物館は1987年に創設された。なぜナショナルな博物館をつくる必要があったのかといえば、19世紀につくられたナショナルな博物館は文化・芸術に焦点があり、歴史や政治に焦点を合わせたものではなかったからである。本館の主なコンセプトは80ページに渡るが、一言でいうとドイツが近隣諸国にどのような影響を与えたのか、多様な視点を用いているところに特徴がある。フランスのナポレオンやルイ14世なども展示している。現在の企画展ではフランスの移民というドイツにおける他者の問題のテーマを扱っている。以前はそのような視角をもつナショナルな博物館はなかった。

このような特徴から去年はアメリカと協同し、冷戦における東西の特別展をした。同じく2009年はドイツがポーランドを侵攻した70周年にあたり、ドイツ・ポーランドの20世紀史の展示を行った。第一次世界大戦の展示では、ヨーロッパ各国の協力を得て、アーティストの作品も展示した。私がキュレーターを務めた1998年の中国の青島に関する展示の説明文ではドイツ語と中国語を表記した。

もちろんナチスの歴史展示も複数行っており、学校教育で扱われることから多くの学生が見学に来た。学校用のパンフレットも作成し、授業でも使えるように工夫し、教員用のゼミも提供している。その他には1945年に焦点をあてた特別展が挙げられる。これは28カ国を招待し、28カ国それぞれにとっての1945年のもつ意味を展示した。すなわちある国にとっては1945年は敗北であり、解放であり、民主主義あるいは社会主義の独裁の始まりを意味したというように、この企画展でも多様な視点が貫かれているのである。

見学者の反応や抗議に関してまず全てのリクエストには応えられないということがある。政府の資金で運営している以上、資金には限りがあるからである。本館では年間7から10の展示を行っているが、見学者とメディアからの反応が時には一致しないという問題も存在する。基本的には政治からの圧力もない。ドイツの憲法で保障されているように学問の独立が原則である。ただし、政治側の期待が存在しないわけではない。その期待によってどのようなテーマの企画を行うのかというきっかけにつながる部分はある。

見学者の反応は1人1人のアンケートができていないので、どういう意見を個別に持っているのかはわからないが、2009年には80万人の入場者数を記録した。これはベルリンの博物館では第2位の入場者数である。入場者は1年に1回しか数えていないため、大まかな推測になるが、海外からの見学者、学校関係、ドイツ人がそれぞれ3分の1ずつといった感じである。観客の客層は常に意識しており、今回のフランスの移民の展示は、ベルリンに住むトルコ人や移民などを客層に想定している。本館では「これが歴史である」といった単線的な展示をしたことはなく、絶えず他者の視点を入れることを意識している。戦争展示でも戦略よりも戦争で暮らす人びとに注目し、文民と軍人・兵士の生活の双方を展示する。

いまはヒトラーとドイツ人の展示を企画中であり、なぜ人びとはヒトラーに魅了され、彼を選択したのかに迫ろうと考えている。ただし、こうした展示は右翼はあまり興味がないようで、見学に来るようなことはない。本館では戦争展示などに関しても自主規制は存在しない。政治家も博物館に政治的な意見を表明することを控えている。小さなリクエストを受け入れる場合はあっても、博物館のコンセプト自体を邪魔するようなことはない。ドイツと日本との比較でいえば、やはりこれは1960年代からの「過去の克服」の経過であり、ドイツの人びとは歴史認識の免疫があるということである。

政治の相互作用でいうと、博物館の戦争展示でドイツ側がポーランドに協力を要請するといった場合、ポーランドのリベラル派はそれを歓迎し、ポーランドの保守派はポーランド国内で「ドイツ人は戦争好きだ」というイメージを維持したいため歓迎しないということはある。

現在のところ本館では予算を減額されるということもない。本館の上位に位置するのが評議会である。連邦政府、連邦議会の議員、各州の代表者が3分の1ずつを占め、1年に2回館長が企画を評議会で説明する。企画によっては各州の代表者がその企画であれば自分たちの州で展示をすると述べる場合もあり、本館が協力するという対応を取る。館長の選出方法は、研究者で構成する委員会が候補者を決め、評議会に推薦して選ばれている。

運営面について展覧会、シンポジウム、出版などの企画は1年以上前に申請をし、基本的な予算は省庁に依頼する。予算が足りない場合は色々な種類の財団や文化財団、LOTTOなど宝くじの財団等に頼んでいる。本館の1年間の経費は2000万ユーロである。寄付を募る必要性は、展示だけでなく例えばドイツ語で書かれたアメリカ独立宣言のポスターのように急いでお金を工面して資料を買うときにも発生する。寄付金は出資者の利害を考え、もらったお金は無駄にせずきちっと使うことが重要である。

本館がナショナルヒストリーの展示であるという指摘はあたらない。特に中世の展示を見てもらえればわかるが、キリスト教の歴史展示はそもそもドイツ史とは関係がない。むしろ批判があるのは「ドイツ的でなさすぎる」というものである。何がドイツなのかという問いは常々存在しており、簡単に答えられるものではない。ただし、ドイツ語という言語はその問題を考える際の重要な文化現象ということはできる。領域が変わりやすいヨーロッパの中に存在するドイツにとってこれは特徴的なものである。

2.2. ユダヤ博物館 (Jewish Museum Berlin)

2010年2月16日 常設展示責任者クリューガー氏 (Ms. Maren Krüger)

来館者調査責任者ビルケルト氏 (Ms. Christiane Birkert)

全体的な来場者からの反応はポジティブなものである。最初はホロコーストの展示を期待していたが、2000年に及ぶユダヤとドイツの関係の歴史を知ることができ、新鮮な驚きがあったという評価が多い。6週間ごとに訪問動機を訪ねているが、歴史への関心や建築自体の魅力などが大きな要因に挙げられる。見学者の展示内容の評価に関してドイツ人と日本人で顕著な差は認められない。それよりもむしろ個々人の事前知識の有無によりその認識は異なっている。本館では人気が出ることも重視している。知識がある人もない人も楽しめるような工夫を考えている。

入場者数は開館初年度は68万人で、現在は75万人を記録し、徐々に増加傾向にある。この訪問者数は博物館として成功しているといえる。ベルリンには50万人以上の入場者がある博物館は10館であり、本館もその1つに入っている。修学旅行や団体のツアーガイドの見学者は全体の入場者の60%を占め、7500グループが1年間に訪れている。また総入場者の3分の1は外国人である。ベルリンの日本人訪問者5万人のうち本館を訪れる日本人は1年に1万人いる。

この博物館は連邦政府のお金で運営され、国立ともいえる。1200万ユーロが1年間の予算で、そのうち300万ユーロが博物館の収入から賄われている。政治側からの圧力はなくむしろ支援されている。もし圧力を受ける事例があるとすれば、それは誤った事実を展示したときであろう。

ホロコーストに関して本館はもちろんその重要性を認識しており、1つの軸であると考えている。テーマをよりよく展示するため手紙や思い出の品といった個人の歴史や、建築との相互作用に力点を置いている。死体焼却施設をつくったドイツ企業の特別展を行ったこともある。ただしホロコーストはドイツのテーマであり、ユダヤの視線によって展示を行う本館にとって迫害の歴史展示は私たちの課題ではなく、それはドイツ歴史博物館などが取り組むべき内容である。

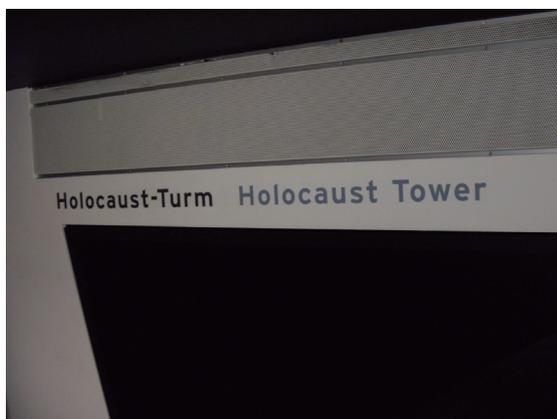
展示の自主規制というものも存在しない。1980年代途中まではそういった自主規制もあったかもしれないが、ホロコーストの取り組みは学校でも教えられており、その背景として1968年の学生運動が挙げられる。ナチ世代の子どもたちが過去の歴史をきちんと説明しろという要求があったのである。

保守政権から展示内容で批判を受けることもない。それだけ「過去の克服」がドイツでは内面化されているのである。本館では右翼からの抗議などもないが、ダッハウ強制収容所などは地方自治体の運営のため様相は違うかもしれない。

次世代の歴史認識の継承について移民の子どもたちは、ホロコーストなどこれは我々の親が行ったことではないという認識をもちやすく、そうした問題に対応する必要がある。歴史認識の継承で重要なことは、非寛容への向き合いであり、人びとを出身や宗教といったステレオタイプで類型化するのではなく、同じ平等の価値をもつものであるという認識を手助けする展示である。

常設展の担当者は3人であるが、新設時には15人で担当した。企画に関してはまずぼんやりとアイデアを出し合い、それから予備調査を行い、本調査を経た上で、時間があれば展示を実施する前に試行的な機会を設けている。

ユダヤや移民らへの理解や差別をイエスとノーのボタンで選択する電子機器は開館当時から備えられている。途中で質問内容は変えた部分もある。それは遊びの要素としても機能しており、そのような問いに接することで訪問客に考える材料にしてもらう意図がある。この機器は1人で何回も押すことができるので、集計・分析の対象としては考えていない。「あなたの友人に反セム主義者はいると思うか」という質問に関してノーを選ぶ人が40%から50%いる。しかしそれは印象論であって、本当であればほとんどの人が100%イエスを押さなければならないのである。



2.3. ベルリン概括

虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑、情報センター

ベルリン、2010年2月14日

地上には2711基の石碑がならんでおり、その地下に情報センターと呼ばれる展示施設がある。館内の展示解説はドイツ語・英語の併記となっており、パンフレットは日本語も含めて複数の言語が用意されている。

まず、導入部分ではナチスによる対ユダヤ人政策の概要説明があり、そのつきあたりには大きな顔写真が6枚展示されている。これらはみな虐殺の犠牲となった人々の写真であり、大人から子どもまで、男性も女性もといった多様さが犠牲者の多さ、幅の広さを象徴しているように感じた。

次の照明が落とされた部屋では、ユダヤ人が迫害されゆくなかで書いた手紙などの記録を、床のパネルで展示している。また、周りの壁にはヨーロッパ各国の犠牲者総数が記されている。その次のスペースは「家族の部屋」として、15組のユダヤ人家族が取り上げられている。一枚の家族写真からその一家がどのような運命をたどったかが紹介されており、大家族であってもそのほとんどが収容所で亡くなっているケースが多く見られた。

その次の区画は、壁に犠牲者の名前と生没年が映し出され、音声（ドイツ語）でその生涯を読み上げていくシステムである。パンフレットによれば、すべての人物データを読み上げるには6年半以上もかかるという。ただし、ここで紹介されている犠牲者の情報は現時点で判明している分であり、犠牲者の半分以上は今なお氏名等も不明であるようだ。

その次は「現場の部屋」として、ユダヤ人虐殺に関わる具体的な「場所」を紹介する区画となっている。収容所をはじめ、虐殺の現場なども写真・絵画などで示されている。これ以降には、情報検索用のコーナーが展開される。ヨーロッパ内の記念碑や史跡、研究施設などを検索できたり、迫害された人々の証言映像が閲覧できる。証言映像は個々の検索機だけでなく、スクリーンでも観られるようだった。

記念碑、センター内の様子は静謐で落ち着いた印象であったが、ときおり生々しい写真なども見られた。ヨーロッパにおけるナチスの対ユダヤ人政策の概要を改めて確認できるとともに、個人にクローズアップするなど後にユダヤ博物館などでも目にした展示手法が用いられており、今回の調査の導入としてふさわしい展示施設であった。

「壁」の博物館（チェックポイント・チャーリー館）

ベルリン、2010年2月16日

チェックポイント・チャーリーとは東西の境界線に設けられた検問所であり、この「壁」の博物館はそのすぐ近くにつくられている。

1階から2階にかけてベルリンの壁に関する展示となっており、3階では世界の人権闘争について全般的な展示がされている。また、解説はドイツ語、英語、ロシア語、フランス語が併記されている。

壁についてのコーナーでは、写真や解説などがコラージュのような手法で展示されている。壁の成立の過程や壁をめぐる起こった事件のほか、壁を超えて逃亡するためにどのような工夫がこらされたか、実際に使用された改造トラック、車の部品といったモノ資料も併せて紹介される。また、階段の壁には子どもたちが描いた絵が貼られている。どれも壁をテーマに、有刺鉄線などが描かれたものである。

3階では人権闘争を広く紹介していることもあり、専門的な博物館というよりジャーナリスティックな要素を含んだ記念館という印象を受けた。また、窓からは検問所跡・東西壁の象徴的な角が一望できた。検問所跡のごく近くに立地していることもあり、修学旅行生なども多く立ち寄る施設のようで、館内は常に混んでいた。

2.4. ツェツィーリエンホーフ宮殿（ポツダム会議開催地）

ポツダム、2010年2月14日

ポツダムはドイツ東部、ブランデンブルグ州の州都である。

見学したツェツィーリエンホーフ宮殿は、1917年、ドイツ帝国最後の皇帝となったヴィルヘルムⅡ（1918年退位）の皇太子夫妻の住まいとして建てられた。英国チューダー様式（木組みの梁や柱に漆喰や煉瓦の壁を持つ）で建てられた宮殿で、一つ一つ煉瓦の組み方を変えて文様を浮かび上がらせている多数の煙突が眼を引く。また、1945年7月～8月にかけて、英米ソ3国首脳によるポツダム会談の場となったことでも有名な建物である。

現在は建物の一部を見学施設、一部をホテルとして使用している。見学施設はガイドと共に各部屋を回る形である。多言語対応の音声ガイド（日本語もあり）も貸出しており、各部屋の皇太子夫妻の使用状況とポツダム会談での使用状況を、エピソードを交えながら説明する内容となっている。（内部は写真撮影不可。）

まず、廊下部分に皇太子夫妻やポツダム会談関係の写真パネルや史料が展示されている。その奥には音楽室、ポツダム会談時にはロシア控え室となった皇太子の妻の書斎がある。音楽室を抜けると会談が行なわれた広間がある。円卓は当時のまま置かれており、円卓中央には英、米、ソの各国旗、その国旗の先には肘掛け付の椅子が置かれている。音声ガイドでは、当時の座席配置などの解説があり、肘掛け椅子には首相が座り、その右側に通訳、左側には参謀、首相らの後ろに各国の高官達、そして一番外側の座席に筆記録者が居た事が解説されている。

会議室には扉が3つあり、各国が廊下などで顔を合わせず、直接会議室に入ることが出来るように控え室が配置されており、続く扉の向こうにはアメリカ控え室、その隣の扉にはイギリス控え室となった皇太子の書斎がある。円卓をはじめ、机などの調度品の一部はポツダム会談の為に用意されたものであり、イギリス控え室では、趣味に合わせてわざわざネオ・バロック様式の机と椅子を取り寄せた事などもエピソードとして語られている。

また、イギリスのチャーチルが会期中の総選挙で大敗、帰国し、アトリー首相に代わった事、アメリカもテヘラン、ヤルタ会談後に倒れ、4月に死去したルーズベルトに代わりトルーマン大統領が参加した事などから、3つの会談を通して出ていたスターリンの主導で会議は進んだと語られている。最後には「ポツダム協定」、日本の無条件降伏を勧告する「ポツダム宣言」、原爆投下、そして終戦までが語られて、音声ガイドは終了する。

このように、現存する建物からドイツ帝国最後の皇太子の宮殿での生活とポツダム会談について知る事が出来る見学施設となっている。近くには大型バスも止ることが出来る駐車場が完備されており、当日も団体の見学者が多かった。



2.5. アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所 (Das Konzentrationslager Auschwitz-Birkenau) および ポーランド国立オシフィエンチム博物館

2010年2月18日 中谷剛氏 (同博物館公式ガイド)

アウシュヴィッツの入場者数は昨年過去最高を記録した。日本人の入場者は増えていないが、欧米を中心にますますアウシュヴィッツへの関心が高まっている。昨年はイギリスが1番多く、次はイタリア、3番目がフランスである。これはここ4～5年の変化で、まだ日本の研究者にあまり知られていないため、みなさんにこの現状を実地で感じてもらう機会にしてほしい。

こうした入場者が増えている背景としてやはり約20年前に冷戦が終焉したことが大きい。多くの西ヨーロッパの人たちが当館を訪ねることができるようになった。この傾向が今後どうなるかはわからないが、冷戦後におけるホロコーストの教育が浸透してきたということはいえる。本館では特に春から夏にかけては非常に混んでおり、屋外の写真撮影は歴史を継承するという意味でも自由であるが、屋内の展示撮影は混雑防止を兼ねて禁止となっている。今年は65年の節目を迎える年でもある。そうした長い年月が経ったことで、ヨーロッパの人たちも感情が先立たず見られるようになった側面がある。

強制収容所はミュンヘンのダッハウが最初で、その経験がアウシュヴィッツにいかされた。アウシュヴィッツはポーランドの兵舎を利用したものである。アウシュヴィッツという地名自体、ドイツ語で発音しやすく変えられた名前である。強制収容所の特徴は、囚人同士で生存の自由を求める競争をさせたことである。例えばアウシュヴィッツを生き抜いた画家が戦後当時を思い出して描いた絵にはドイツ人の監視員が描かれていることは少ない。つまり管理は囚人同士で済んだということであり、元囚人同士で訴えるという事態が起こったのである。どうしてこのような政策が国家として正当化されたのか、そのことを巡りながら考えてほしい。当時のドイツは多くのノーベル賞の受賞者を出し、医学もトップレベルであった。音楽や哲学の歴史・文化も豊かなそのドイツがホロコーストを起こしたのである。

ガス室では時に1000人、1500人、2000人の規模で殺された。1mに5～6人が満員電車の状況といわれるが、ガス室では抱き合うように10人が詰め込まれ、10～20分で窒息死する。ドイツがこのガス室を設けた大きな理由は2つある。1つは、「効率良く」殺害すること。もう1つは、こうした殺害作業にあたるドイツ人兵の精神的な負担を軽減することにある。

ただし、ドイツはこの強制収容所を隠匿していたわけではなかった。国際社会に政治犯収容という名目で公表していた。政治犯の荷物は、しっかり預かり証も発行した。囚人名簿は12枚もコピーをし、ベルリン等の関係部署に送られ、記録を作成することで正当化していった。ガス室に直行させられた者は記録さえ存在しない。囚人たちも番号化されると従順化していき、ドイツの一流企業でさえ囚人を働かせることは当然と思っていた。こうしたシステム化(集団コントロールを悪用化)することでドイツ人の誰もが強制収容所に疑問を抱かなくなり、なぜ少年が政治犯なのかということも不問にされていく。

本館では、囚人たちの髪、金歯、コート、スーツ、鞆、パジャマ、下着など多くのものを展示しているが、当時のドイツにとって「ユダヤ人」からそれらを篡奪したという意識はなく、「ユダヤ人」のもっていたものを我々が取り返しただけという認識であった。そして誰が「ユダヤ人」かはドイツ人が決めていたのである。「ユダヤ人」だけではなく、障害者、同性愛者、エホバの信者であるドイツ人も強制収容所に入れられた。

今年65周年という5年区切りの節目を意識しているのは、もう生存者が少なくなっていることを意味している。1964年までは全てのガイドが体験者であった。いまは冬だが、ポプラの木が咲く頃は、大学のキャンパスのような風景になり、当時の状況を想像できない人がいてもおかしくはない。ただ、やはり現場のもつ力も大きく、歩いているだけでも記憶に残るといふ作用がある。政治的正しさのある回答は簡単だが、「でもね…」という現実の思考・反応が入ってくる。ここからはみなさんにバトンタッチする部分である。

日本人の入場者は約 7000 人である。4000 人の年もあり、そのときは中国やシンガポールの入場者の方が多い。日本人に比べて韓国人の入場者の方が群を抜いて多い。植民地支配や侵略を受けた国は自然に訪れることができても、日本人はここまで来る目的を見出しにくいという部分がある。日本が経済的に落ち目になってくる未来に、かつてドイツが経済的に苦境になって選択した歴史と同じ道を繰り返さない保証はない。ヨーロッパが振幅が少ないのに比べて、日本は振り子のように社会が激しく右にも左にも動きかねない危険を有する。経済がわるくなったとき日本はどのようにして乗り越えるのかが問われている。

本館は 1955 年から展示内容を変えていない。その部分が高く評価されている。ポーランドからの予算だけでは維持運営が難しいものがあるため、欧州連合から予算を出してもらおうという流れになっている。EU はそれだけ政治的に安定しており、EU にとってもアウシュヴィッツが重要かつ必要な歴史になってきたということである。逆にいえば、ヨーロッパのような地域共同体や政治的成熟があれば、日本の歴史認識も変わる可能性があるかもしれない。

とりたてて本館に対する反発やプレッシャーというものは存在しない。加害者に対する攻撃性ある展示はなく、それを目的としているわけでもない。展示はプロパガンダ的なものではなく、全体的に説明文も少ない。ただ「ユダヤ人」から髪の毛などこういう形で展示してほしいという声はある。

今日はみなさんが研究で来られているため色々説明したところがあるが、普段は入場者に考えてもらいたいので、今回のように多く話すようなことはしていない。むしろできるだけ話さないようにし、「抑えよう」、「抑えよう」と絶えず自分に言い聞かせている。ガイドも様々な人がいて、祖父が殺されたガイドもいる。入場者にそのつど断れば、ガイド自身の意見を伝えること自体は構わない。

欧米の人だと何か意見をもっているのが、ガイドをする方でもバランスが取りやすい。日本人にそれができないとは思わないが、比較するとどうしても批判精神が少なく、拝聴する形になるので、ガイドが一方的になり難しい。『地球の歩き方』に記事が載ったのは 1996 年で、自分の名前が知れてくるとかえってやりづらい部分が出てくる。名前が知られていない方が、見学者も懐疑的にガイドを聞いてくれることも多く、楽しかった。

ガイドは全体像を伝えるのが役割である。当事者が自分の体験にこだわるのは当然であり、それを尊重することはいうまでもないが、体験者が自分の知らないことを話すと事実から外れることになる。しかしガイドである自分自身も歴史を作ってしまう恐れがあり、つい劇的にしてしまう危険性がつきまとう。そのようなとき生還者や歴史家の話を聞くと落ち着きを取り戻すことができる。自分が外国人というメリットもある。ポーランド人同士だと言えないことも多いが、外国人だと相手にわかってもらいたいため丁寧に話してくれることがあるからである。

ネオナチがデモをしても、それに反対する抗議が起これ、ネオナチのデモの効果はない。それが日本だと反対する人たちが少ないということは指摘できる。社会状況が悪化したとき外国人のせいにするのが往々にしてある。例えば外国人犯罪で治安が悪化しているという声が起きるなど、そうしたとき日本では反対できない人が一番多い。もちろんこのようなことを教育した場合、反発する人もいるだろうが、それ以上にホロコーストの歴史認識を含め反対できる教育が重要だという選択を現在ヨーロッパがしているということである。日本はまだそれに関しては迷っている状況にある。



2.6. クラクフ概括

2010年2月19日 クラクフ市巡検

クラクフ旧市街

クラクフ旧市街は、ヴェヴェル宮殿、市庁舎、織物会館（改装中）、教会、修道院など、ゴシック様式、ルネッサンス様式、バロック様式の建物が現存する、町自体が建物の博物館の様であり、内部を博物館として使用している建物も多い。

市街の至る所に教会や修道院があり、旧市街中央部にはキリスト教カトリック信仰、中でも特にマリア信仰が盛んなポーランドを象徴する聖マリア教会はじめ、ドミニカン教会、聖ペテロ聖パウロ教会など荘厳な教会が並ぶ。

カジミエーシュ地区（ユダヤ人居住区）

かつて、クラクフ市内のゲットー（ユダヤ人強制居住区域）となっていた区域。

クラクフ旧市街に比べ高さの低い建物が多く、修繕状況の悪さや落書きなどが目に付き、雰囲気が変わる。

地区内に6つあるシナゴーク（ユダヤ教の会堂）の内、一番古いステラ・シナゴークを見学した。現在はクラクフ市歴史博物館が旗艦となって公開する、恒久かつ特別展示も行なうクラクフ市内博物館の一つとして、ユダヤ民族について展示を行なう施設となっている。当日は特別展示として「PILLARS of JUDAISM」が行われていた。展示品の名称カードにはポーランド語、英語が表記されており、ユダヤ教の中心となる Torah（律書）をはじめとしたヘブライ語聖書、教義書、祈祷書、Menorah（七本枝の燭台）など儀礼用具、Rabbi（律師）の書物や装束など、実物を中心とした展示が行われていた。パンフレットによれば、展示品はクラクフ市歴史博物館のコレクションを使用しているそうである。

建物内部は白く塗り直されていたが、一部、以前の壁に描かれていた文字などが見えるように残されており、展示されている写真と共に聖堂内の旧観を伝えている。

その他、地区内を歩きながら、レーム（シナゴークと墓地）やテンペル・シナゴークなど（外観のみ）を見学した。



3. 個人報告

3.1. 石田七奈子

ドイツ、ポーランドへ実際に赴き、博物館、追悼施設など戦争展示と関連する施設を見学したことは様々な知見を与えてくれた。

特に実際に展示を見て興味深かったのは、ドイツ歴史博物館での戦時中のドールハウス（写真1）とユダヤ博物館で展示されていたすごろく（写真2）だ。

ドールハウスは1933年にドイツ国内で、すごろくは1930～1934年のベルリンで使用されていたものである。ドールハウスの壁にはヒトラーユーゲント（ナチスドイツの青少年団）の様子を描いた壁紙が貼られ、部屋中央にはナチス将校の写真が飾られている。

すごろくは「Dice Game Aliyah」というタイトルのすごろくで、ドイツ・ベルリンからのアーリヤー（パレスチナ、特にイスラエルへの移住）の過程を辿る。どちらも第二次世界大戦勃発前の、それも子どものおもちゃから、当時の社会状況を推察することができる展示品だ。

ドイツ歴史博物館、ユダヤ博物館はどちらもベルリン市内にあり、同じように連邦政府から（金額は違うものの）資金が出されている博物館である。ヒアリングでそれぞれの館のあり方について、ドイツ歴史博物館はヨーロッパ全体から見てドイツの歴史を辿っている、ユダヤ博物館はユダヤ民族の生活を中心に戦争に偏らない展示をすることでドイツ歴史博物館と役割分担をしていると聞いた。しかし、同じ第二次世界大戦直前の状況を示す同じような種類の展示品が、それぞれの博物館に分かれて展示されている事が、はたして単なる役割分担なのか、それとも「ドイツの歴史」から抜け落ちてしまった物なのか、ヒアリングでは聞きそびれてしまい、疑問だけが残った。

もちろん、常設展示には物理的な面も含めて限界があり、ドイツ歴史博物館でも、そうした限界に対して特別展で補っていく形をとっているが、この事例のように、同じ場所に置いてこそ当該時期の状況を知ることが出来るのではないと思う展示品もあり、戦争のあった時代をどう展示するか、また、多角的な視点を保つためにどうしたら良いのか、考えさせられた。

また、展示ガイドのあり方についても、学ぶ点が多かった。私自身、国内の博物館では日本語で書いてあるので、音声ガイドを借りることがほとんど無かったのだが、今回の滞在中、ドイツ語やポーランド語は解らず、英語も不安なため、音声ガイドを借りる機会や、アウシュビッツ博物館のように日本人ガイドの方の案内でまわる機会があった。

特に、アウシュビッツ博物館では、博物館はガイドに対し「なぜ、このような事が起きてしまったかの当時の社会状況への考察を求める展示姿勢、また、その悲劇によって傷ついたユダヤ民のその後、研究成果の反映」を明確に示させ、ガイド個人の思いを言うときに自分の意見であることを示すように指示している点、ガイドになってからも博物館で学習の機会が用意されており、ヨーロッパや世界のアウシュビッツに対する現在の姿勢や研究状況についてなどの最新の情報が反映されている点など、博物館でのガイドやボランティアへの教育や、生きた情報の提供について見習うべき点が多かった。

今回の調査では、ドイツ・ベルリン、ポーランド・クラクフの市内を巡見した事も、様々な知見を与えてくれた。

特に、ポーランド・クラクフでは、クラクフ市歴史博物館の主導で、旧市街、カジミエーシュ地区も含めた市内の各歴史的建築物に設置された博物館と連携し、それぞれの特徴を生かした展示を行っている現状を知ることが出来た。天候の悪さもあって、観覧者は少なかったものの、歴史的建造物が多く残り、ゲッソーの跡も残るクラクフでの、市全体での歴史展示の取組みは、戦争展示を考える上でも興味深い。今回は、時間の都合などもあり、見る事が出来なかった場所も含め、改めて詳細に見学、検討したいと思った。

また、街の案内図（観光ルートなども掲示したもの）に、シナゴーク等ユダヤ民族に関する観光ルートにだけ、黒のマジックで×印がいたずら書きされているなど、誰とも知れないが、ユダヤ民族に対する複雑な感情持つ人が今もいる現状を知ることが出来た。

戦争があった時代をどのように展示するのか、歴史博物館にとって、そのスタンスを問われる展示課題である。

特に今回赴いたドイツ、ポーランドは共にユダヤ民族などへの迫害という大きな課題を持っており、その禍根とどう向き合い展示しているかは、とても参考になった。

今回の調査で、ホロコーストに関して、ヨーロッパ全体の責任という視角から研究、教育が進められており、その結果、アウシュビッツ博物館では年間の来館者が2000年以降増加している事を知った。しかし、アウシュビッツ博物館での来館者の増加は、単に教育だけでなく、客観性の保持を求めるスタイルとガイドの解説の中にそれらの研究成果が早々に反映される構造を持っている事で相互作用が働き、増加につながっていると感じた。

では、日本ではどうだろうか。この調査を前に個人的にしょうけい館、昭和館、遊就館など、戦争関連の展示がある博物館を見学したが、個々のテーマに即した展示のみで、感傷を超えて考えることを促す展示は見られなかった。

2010年3月に国立歴史民俗博物館では、日本の国立の歴史博物館としてはじめて第二次世界大戦を取り扱った、第6室の展示が行なわれる。今回の調査で得た知見を糧に、第6室の見学、また、今回見ることが出来なかった博物館、その他の国の博物館の見学も含め、戦争の時代を展示について、これからも考え、向き合っていきたい。

3.2. 荻野夏木

日本歴史研究専攻学生による博物館関連のプロジェクトへは、私は今回が初めての参加となった。博物館施設自体に興味関心があること、また現在戦争展示関連の施設で働いていることからこの調査に加わったが、今回だけでも多くを学ぶことができた。

現地で実感したのは、ドイツひいてはヨーロッパ国内において歴史が過去の事実として冷静にとらえられ、同時に現代に活かせるものとして共有されようとしていることだった。歴史展示に対して規制や反発が生じることはなく、もしそのような動きがあったとしたら市民側から抗議活動が起こるだろうという現地博物館関係者の方の指摘からは、歴史問題において市民が主体となっていることを改めて感じさせられた。また、アウシュビッツ・ミュージアムに対しては近年 EU の拡大につれて関心がより高まっているなど、いま現在の政治的背景が大きく影響しつつも、過去は過去として現代社会とは適度に距離が置かれていることも強く印象に残った。

一方で、ユダヤ博物館に設置されたアンケート装置では「トルコは EU に加盟すべきか」という問いへの回答で是と非が半々であったり、今もなお存在するユダヤ人への偏見、移民の問題など、ヨーロッパ社会が抱える現状の複雑さも垣間見えた。しかし、現在の立場や価値観によって過去の事実の認識すら左右される日本と比較して、「過去の克服」に向かう姿勢もその蓄積においても、見習うべき点が多いように思った。

現在のヨーロッパにおける歴史認識は、共同体としての歩みを背景に、当事者が参加することによって長い年月をかけ成立したものであると思う。展示手法の観点からも興味深かったことであるが、近年では社会全体の歴史と個人にクローズアップした個人史とを併用する風潮が高まっているという。現在、私自身が働いているしょうけい館（戦傷病者資料館）という戦争関連の展示施設でも、個人の資料や体験記、証言映像を多用する手法をとっているため、この点についてはとくに興味深かった。同時に、加害・被害を含め戦争の評価を当事者に求めるのには限界があり、それを受け取る側が冷静に評価をする必要がある、しかしその受け取る側にも限界があり、だからそれぞれに出来ることをすべきだというアウシュビッツガイド・中谷氏の意見が非常に印象に残った。ここには、当事者でない世代がどのように歴史と向き合い継承していくか、その糸口的一端があるように感じた。

今回訪問した博物館では、「物事の多角的な見方を養う」ことを学習の目的として掲げていた。EU 内で歴史教科書を共同執筆するなどの歴史認識を共有する作業が行なわれていることは以前から知っていたが、そうした試みは一つの価値観に基づく共通の教科書をつくるためでなく、同じ出来事に対する多様な認識の存在を受容することが目指されてのことなのだろう。また、その伝達の方法においても、伝達する側にもさまざまな立場があり、意識やアプローチの違いがある、これらを明示することで、教えられる歴史を相対化し、自らの考えを持ち、それらを共有していく可能性が開けるのではないか。

近年、アジアにおいても近現代史の共同研究が進められるようになったが、そこへ戦争の当事者世代が関わっていくことは時間的な問題からも困難だろう。EU とは違い、当事者からは離れた世代が相互理解の構築につとめていかなければならない。その難しさを自覚しながらも、そこで出来ることとすべきことを冷静に判断し、他者とともに携わっていくことが必要である。今回の調査を通じて、そうした歴史学への向き合い方を改めて考えることができた。

3.3. 工藤紗貴子

今回見学をした多くの博物館は、これまでわれわれが見てきた歴史系の博物館とは、多くの点が異なっていたが、その中で特に気になった点は、それらの博物館の多くで、アート系の印象をあたえる展示手法を用いていたことである。ぱっと見たときに、美しく、何かを直感的に理解できたような気になるが、わたしには美術的な展示品が、その歴史事象、時代を表すアイコンとして用いられることへの疑念が抜きがたく、ある。

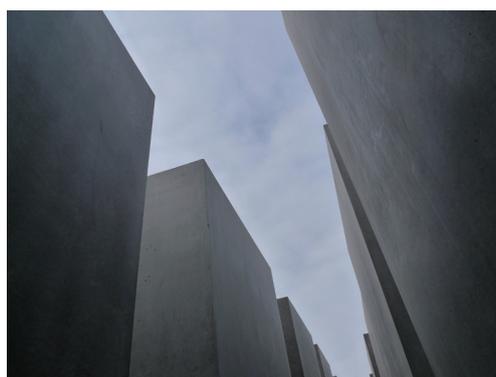
ベルリンの初日に訪れた、「虐殺されたヨーロッパ・ユダヤ人のための記念碑および情報センター」の地上部分は、墓石を想起するような3000基あまりの、暗灰色の方体の集合である。大きさの異なる、微妙に歪みのある、直立していない石の群れは、その大半が雪にうもれている季節であっても、人目を引き、何らかの違和感、非日常感を周囲に漂わせるにじゅうぶんなものであった。もちろんその方体には意味があり、ユダヤ人たちの艱難が象徴され、空気感として人々に印象づけられる。

ケーテ・コルヴィッツの作品レプリカが、天から差す光や風雪にさらされる石造の建物「ノイエ・ヴァッヘ」、ユダヤ博物館の「ホロコースト・タワー」など、見るものを圧倒する物量で、有無をいわず説得力を以て迫ってくるあり方は、それが特に博物館である場合に、展示側の恣意性が強すぎないだろうか。

そういつつ、全くの恣意性のない展示もありえないということも事実としてあり、見学者に、その場に来てよかったという印象を持って帰ってもらうためには、ある程度のわかりやすさ、そして圧倒的な雰囲気というものが必要なものであるかもしれない。

しかし、展示、特に歴史展示というものは、地味で愚直で、いささか野暮ったいくらいのほうが、訴求力が強いのではないのか、と考える身としては、スタイリッシュに過ぎるものは、見た目の美しさの向こうにあるものに、見学者の思いを致させることが、難しくはならないだろうか、となお思わざるを得ない。

特に博物館資料を用いるワークショップの手法としてのアート性と、展示手法のアート性の混同は、危険なものではないかというか危惧もある。何をどう展示するのか、ということは、歴史展示の方法の大きな課題だが、見た目のインパクトだけでスタイリッシュな方向へ向きすぎない姿勢ということも、看過してはいけないだろう。



3.4. 伊達元成

本プロジェクトでは、ドイツ及びポーランドの歴史系博物館を見学し、ドイツ歴史博物館、ユダヤ人博物館、アウシュビッツ博物館については、現場の担当者と直接インタビューを行った。作る側と見る側とが戦争の歴史展示をいかに活用するのか、そこに焦点を当てたものとして本プロジェクトは企画された。

プロジェクトを通して、博物館活用という点で日本とそのコンセプトが違う点に注目した。

どう見せるか どう考えさせるか

調査したどの博物館でも、来館者にどのように見せるか、そしてどのように考えさせるか、を重点とした展示が行われていた。つまり多様性のある様々な視点から、いかに自分の考えを導き出すのか。このことを常に考えることが来館者に求められるように作られていた。

たとえばドイツ歴史博物館では、ドイツが近隣諸国にどのような影響を与えたのか、それを多様な視点を用いて構成されていた。その中にはフランスのナポレオンやルイ 14 世なども展示されていた。ここでは過去の出来事について、ただ一つのストーリーだけを提供することを極力避けている姿勢を伺うことができた。これは展示を作る側だけではなく、来館者にも展示を読み解く「体力」が必要であることを意味している。このような展示手法が可能な背景として、1960年代からの「過去の克服」の経過であり、ドイツの人びとは歴史認識の免疫があるということである。

日本と違い、国家の領域が時代と共に劇的に変化したヨーロッパ諸国では、「自分は何者か」を常に考えているのではないだろうか。それが国民一人一人のアイデンティティを作り出すことであり、「自分の考え」を持つということは日本と比べ、比較的敷居が低いのかもかもしれないと感じた。

博物館機能に求められるもの

現在の博物館に求められる機能として、資料収集機能、整理保管機能、調査研究機能、教育普及機能があげられる。これらの個々の機能については、様々な分野において研究が行われており、それらを統合する形でミュージアムマネジメントが広く叫ばれるようになった。

本プロジェクトで、ヨーロッパの博物館を見ていくうちに、博物館機能には「ところで、あなたの考えは？」ということ誘発させる機能がより必要とされるべきではないかと感じ、その機能を充実させることで博物館はもう何歩か前に進めることができるのではないかという考えが巡るようになった。多くの博物館を利用する来館者は、展示を見ても「拝見する」という姿勢だったり、研究者の話を「拝聴する」という姿勢だったりほとんどではないだろうか。

アウシュビッツ博物館の公式ガイドである中谷さんは、「欧米の人だと何か意見をもっているのだから、ガイドをする方でもバランスが取りやすい。日本人にそれができないとは思わないが、比較するとどうしても批判精神が少なく、拝聴する形になるので、ガイドが一方的になり難しい。」と指摘している。日本では、博物館展示はただ見ておしまいであり、そこに展示されているものが、ただ一つの絶対的な正解品として受け止めているのではないか、また一方でそのように作っているのかもかもしれない。

これまでのプロジェクトからの気づき

2007年2月には「戦争資料館と戦跡・基地の比較見学プロジェクト—沖縄から戦争展示を考える」を行い、沖縄における戦争展示の実際を見て回った。そこでは、沖縄で起こった現実を展示すること、戦争の悲惨さ、戦場の場所、戦後の姿を切り取った形で展示していたように記憶している。少なくともそこから新しい知見を見出すことは難しく、その悲惨さを目の当たりにして整理することでいっぱいだった。

また、2008年2月には「地域を伝えること「移住者の町」北海道伊達市—生活者にとって必要な資料館とは何か?—」を企画し、市民と行政を巻き込んだ形でワークショップを行い、市民が求める理想の博物館像を探った。このワークショップにより導き出された意見は、「つかいやすい博物館」「人が集まりやすい博物館」といった、抽象的な博物館像にとどまり、その中には学習機能といった博物館機能について突っ込んだアイデアは出てこなかった。もちろん「自分の考えを見出す」というアイデアも出されなかった。(※このプロジェクトではワークショップの手法を用いて市民が求める博物館像を探ったものであり、またそのプロセスを重要視したもので、そこから得られた結論はどれも有意義である。)

2つのプロジェクトの経験から、博物館側のコンセプトにも、市民が望む博物館の機能にも「自分の考えを見出す」という考えが根付いていないのではないかと改めて感じた。

博物館を使いこなす

博物館を用いたワークシート、ワークショップの障壁となるものに、「利用者が博物館の使い方がわからない」という理由がしばしば博物館の現場スタッフから聞かれる。展示キャプションの丸写し、宝探的に展示を見つけ消化し、あるいは番号順に徹底的に展示を見て回る閲覧方法は、利用者調査をする中でよく目にする姿である。これでは博物館は疲労を増長させるばかりか、「見る」ことにエネルギーを費やしすぎて、自らの考えを導き出すまでに至ることができない。このような利用方法では博物館の魅力は半減するばかりか、より博物館離れを助長してしまう。しかし、博物館を使いこなすには少しトレーニングというか、経験が必要である。

そのためにも、まずは博物館としてのコンセプトを明確にする必要がある。ドイツ歴史博物館のコンセプト資料は80ページにも及ぶと説明を受けた。また、現場の学芸員のスキルの向上はもちろん、展示ガイドの活用もより一層充実したものが望まれるだろう。印象的なこととして、アウシュビッツではガイドに対し定期的に3時間の講習を受講することが必須の条件とされており、その講習のチャンスを博物館が提供している。ガイドに対し、マニュアルも特に用意しておらず、徹底的に自らが勉強することと、その機会を博物館が用意することで成り立っている姿はとても新鮮であった。

このような人を育てる事業を積極的に行い、そこに市民が参加して博物館を作り、利用することで多様な考え方や文化があること知り、やがて自分の視座や価値観を意識できるようになるだろう。そして精神的な潤いを満たし、豊かな日常生活づくりだすことができる。歴史と向き合ったとき、芸術や音楽に触れた時に心の中で励起される、豊かな精神はこのようにして育まれるはずだ。

毎日残酷な写真と美しいヨーロッパの風景を見ながら、そう考えていた。

3.5. 根津朝彦

ドイツ歴史博物館でもユダヤ博物館でも自主規制や政治家からの圧力はないという明確な返答を得た。最初は正直本当なのか懐疑的に思うこともあったし、今後も見聞を広げる必要はあるにせよ、少なくとも日本の博物館と比べれば、「過去の克服」への向き合い方にもかなりの実質があることをうかがわせた。そのことが一番印象的であった。とりわけアウシュヴィッツ博物館で去年欧米を中心に過去最高の入場者数を記録したことは、その証左といえよう。私たちがドイツに着いた2月13日、ドレスデンの大空襲65年でデモ行進を予定したネオナチに対して1万人以上の市民が「人間の鎖」で対抗していたと知ったのは、帰国後にめくった日本の新聞記事においてである。

ベルリンのブランデンブルグ門の近くにある「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」にも驚かされた。首都の中心部にユダヤ人虐殺の広大な記念碑があることは、ドイツの歴史認識が何たるかを物語っているように感じた。今回はベルリンにおいてドイツ歴史博物館とユダヤ博物館の2館しか重点的に見学はできなかったが、相馬保夫が指摘するようにナチ時代の歴史展示はベルリン周辺に多数存在する博物館や記念施設を総体的にまわり判断すべきものだと考える（相馬保夫「歴史展示のポリテイクス—ドイツ歴史博物館をめぐる論争」『歴史学研究』854号、2009年6月）。

そういう意味では、今回残念ながら訪れることができなかったケーテ・コルヴィッツ美術館、バウハウス展示館、シュタージミュージアム、映画博物館、ベルリンの壁記録センターや、ミュンヘンなど、まだまだ見なければならぬ場所が多く、ユダヤ博物館にしても日本語音声のガイドレシーバーを聞いてまわる時間はなかったため、今後も再訪する価値の大きい地であることを強く実感した。

またドイツ歴史博物館もユダヤ博物館も海外からの入場者を多く呼び込める強みがあり、特にユダヤ博物館は展示内容だけでなく、アイディアや遊びの工夫においても優れていた。戦争展示に関しては、ユダヤ人虐殺の凄惨さの表象不可能性を逆につきつけるかのような暗部に薄暗い光だけが射すホロコーストタワーという建造物にも考えさせられた。

アウシュヴィッツ博物館は日本から気軽に訪問できる距離ではないにせよ、戦争展示だけではなく、人間の弱さ、人間が極限状況になったときどのような行為をなしてしまうのか、そうした普遍的な現実に対峙するためにも非常に重要な歴史遺産であるということが肌身にしみた。そしてアウシュヴィッツだけに強制収容所があったわけではなく、その空間的広がりをも想起せずにはいられなかった。

ガイドをして下さった中谷さんの日本人には反対できない人が一番多いという一言が深く心に残った。日本では民主党政権下の高校無償化政策に関して朝鮮学校を除外するような差別的な動きが現れ、早くも中谷さんの言葉が試される状況が目前にある。それと同時に今回ベルリンとアウシュヴィッツを訪問する貴重な機会を得たが、やはり向き合うべきなのはアジアの歴史であるということにも思いをめぐらさないわけにはいかない。日本の侵略戦争ないし植民地支配の場所であった韓国、北朝鮮、中国、台湾、シンガポール、フィリピンなどの地にある戦争展示を行う博物館もいつか訪れてみたい。その意味でも3月にオープンする国立歴史民俗博物館の現代史展示室がどのようなものになるのか注目する必要がある。そして何より「次世代に受け継ぐ歴史展示」に関わるべき当事者は私たち自身であるということを今回のドイツ・ポーランド行きで改めて自覚できたように思う。

最後にインタビューに応じて下さった関係者の方々はもとより、ベルリンでコーディネートしていただいた山田さん、通訳をして下さった宮崎さん、アウシュヴィッツで案内いただいた中谷さん、そして全体を取り仕切ってくれた伊達さんに心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

謝辞

本プロジェクトを行うにあたり、多くの方のご協力をいただきました。

山田香織氏(総研大地域文化学専攻修了)には、
現地コーディネートのご協力をしていただき感謝いたします。

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程・日本学術振興会特別研究員の
宮崎麻子氏には、通訳としてご協力いただき感謝いたします。
また、お二人には現地の様々な情報を提供していただきました。心から感謝いたします。

海外博物館研究について様々なアドバイスをいただいた、
国立歴史民俗博物館事業課の太田 歩 氏に感謝いたします。

最後になりましたが、本プロジェクトの内容に関して、
助言を頂いた文化科学研究科専攻の諸先生方に感謝すると共に、
本プロジェクトの様々な事務処理をしていただきました
総合研究大学院大学基盤総括事務室の塚田悦子氏に感謝いたします。

本プロジェクトは、平成 21 年度総合研究大学院大学総合日本文化研究実践教育プログラム
教員学生連携研究事業として行われました。